創刊七十周年記念座談会

これからのコスモス、これからの結社

出席者　高野公彦・小島ゆかり
大松達知・水上芙季

小島　創刊七十周年記念の座談会を始めたいと思います。テーマは、「これからのコスモス、これからの結社」ということで、なんとなく未来型のテーマなんですが、未来を考えることはつまり、過去を振り返ることでもあります。今日お集まりいただいた皆さんは、高野さんと小島が十五歳違い、小島と大松さんがやはり十五歳違い、大松さんと水上芙季さんが十歳違い。というわけで、かなり均等に年の差がある四人です。たとえば、高野さんにとってのコスモスと、大松さんにとってのコスモスは、どんなふうにちがうのか。また、一番お若い水上芙季さんは、コスモスにどんな希望や要望をもっていらっしゃるのか。それぞれの年代を通して、コスモス全体を見渡しながら、今後について考えていくきっかけになればと思います。

コスモス入会のころ

小島　高野公彦さんは、常にコスモスの平均年齢ということですが。すると現在の平均年齢はかなり高齢ですね（笑）。失礼しました。最初はざっくばらんに、入会なさったきっかけや、その頃のコスモスのことについてお話しください。

高野　僕が入ったのは、学生だった昭和三十九年の秋です。僕は昭和三十八年から三十九年にかけて朝日歌壇に投稿していたんですが、三十九年の夏のある日、下宿に宮先生から電報がきて「電話くだされたし」と電話番号が書いてあった。電話をしたら「時間があるときに遊びにきなさい」って。コスモスにはまだ入ってないですけど、夏休みだったから次の日に行ったら、コスモスに入れとは言われなくて、「コスモスでアルバイト探してるから、君やってくれないか」と。当時、大田区の守屋ビルの一室を守屋一郎さんのご厚意でコスモスの編集分室として使わせてもらってたんですね。毎月、編集会と校正作業と、ひと月に数日しか使わなくて、あとは空室なんですね。アルバイトっていうのは、そこに住み込みの留守番をしてほしい、ということでした。コスモスに入る前に編集部に入る、みたいな感じ。宮先生のことは朝日歌壇

の選者として尊敬していましたから、留守番のアルバイトを引き受けると同時にコスモスに入ったんですよ。ちょうど東京オリンピックがまもなく開催される頃でした。通信コスモスに「新人紹介」っていう欄が今でもあるでしょ、その頃ひと月に二十数人くらい新入会員の名が並んでいて、偶然ですが僕と河野裕子さんが同じ月に入ったんですよ。

小島　それは輝かしい年ですね（笑）。

大松　守屋ビルには何年くらいお住まいだったんですか？

高野　昭和四十二年に大学を卒業するまでずっとそこにいたから、二年半くらいかな。就職してすぐ市川に引っ越しました。就職も宮先生が河出書房に口をきいてくださった。河出の営業部長がコスモス会員の内島隅一さんだったんです。いろいろな面ですごく宮先生にお世話になりましたね。

大松　ちなみに、結婚相手も宮先生に紹介していただいたって聞いたことあるんですけど。

高野　あっ、そうそう。

大松　就職も結婚も！（笑）

高野　紹介というか、在学中に「君、教育大にいるそうだけど、同じ教育大の西洋史学科に幸田明子という人がいる。会ってみたらどうだ」って言われました。彼女もそのころ朝日歌壇に投稿していたんですね。

小島　高野さんの人生は宮先生が決めてくださったようなものですね。

高野　はい、その通りです（笑）。編集会には宮先生のほかに葛原繁さんや田谷鋭さんや島田修二さんなど、作者としてハイレベルな人たちが集まっていましたから、そういう人たちの会話を聞いたり一緒に仕事をしていると、すごく勉強になるんですね。それから東京歌会にも行くようになって。そこでたくさんのコスモス会員と会って交流できるっていうのも楽しみでしたね。勉強にもなりました。

小島　そのころ宮先生はお幾つぐらいだったんですか？

高野　まだ五十代で、お元気でしたね。宮先生は東京歌会にも必ず出席されました。歌会では的外れの批評をする人もいましたが、人の言うことを全部信じる必要はないということを学びました。最後は自分で判断することが大事ですね。

小島　はい、ありがとうございます。次は年齢順にいくと小島、私になるんですが。私は昭和五十三年の秋に入会をして、ただ翌年には大学を卒業して郷里に帰りましたので、東京歌会に一回だけ行って、あとは故郷の愛知県の支部歌会に参加しました。私も大学で短歌を作り始めたときに宮先生の歌集を読んでいて、歌集『晩夏』が好きというようなことを話したときに、早稲田の短歌同好会の先輩が「じゃあコスモスの若手のグループを紹介してあげよう」ってことで「桐の会」に入り、それをきっかけに。

　もう一つは、母の静子が私の高校生の頃からコスモスに入っていて、家に宮先生の本がたくさんあったので、自然に親しみ深い気持ちになっていたんですね。いまよりは若い層が多かったんですね。ですからやっぱり人とのつき合いが楽しかったなと思います。

　では次は、大松さんです。

小島ゆかり氏

大松　通っていた中学高校に奥村晃作さんが社会科の先生としておいでだったんです。高校二年のとき、奥村さんの『鴇色の足』を読んで、おもしろい！これなら作れそう！と思って始めました。そのあと、浪人したときの予備校に田原千佳子さんという詩人で歌人で、英語の翻訳家がおいでした。大学へ入ってすぐ、その先生がいる「Q」という五、六人の雑誌に誘われたんです。それで奥村さんに相談したら、慌てて「じゃあコスモスに入りなさい」となって。奥村さんは大学受かったらすぐに誘うって言ってたのに、なかなか連絡がこなくて（笑）、これはダメなのかなと思って、「Q」っていう雑誌に入りそうになりました。

小島　あぶなーい、よかった～。

大松　入会したのが一九九〇年夏。宮柊二先生は一九八六年に亡くなっていましたけど、ご存命中の熱気はまだ残っていたようでした。茗荷谷の東京歌会では、野村清さん、鈴木英夫さん、今村寛さん。それに宮英子さんがとてもよくしてくれたんです。ふだん、祖父母のことを人間的には好きでも、合う趣味とか話題はあまりないですよね。でもコスモスではその世代の人たちと、短歌を通じて有意義な話ができた。野村さんは九十歳を超えておられた。もちろん世代差があって理解してもらえなかったこともありました。でも、いま名前をあげた人たちは不思議と歌を褒めてくれたんです。何十歳もちがうのにすごいことだなあって。きちんと表現すれば通じ合えるんだな、と思って、今に至ってます。

小島　では最後に、芙季さんお願いします。

水上　私が入会したのは二〇〇五年の六月で、九月号から作品が載ったんですが、入会のきっかけは、まず青山女子短期大学に通っていて、そこで高野先生とゆかりさんが教えてくださっていて。四つ上の姉がまず高野先生の授業をとっていて楽しそうだなって思って。なので、結社に入ろうかなではなくて、最初からコスモスが憧れの場所だったんです。私が入る四年前に母もコスモスに入っていて、大学の一年上に片岡絢さんもいたので。

　ただ、入りたいなとは思っても、毎月十首っていうのが自分にできるかどうか不安で、一年ぐらい一人で毎月十首作ってみようって思ったところに、大松さんからメッセージカードが届いたんです。覚えてらっしゃらないかもしれないんですけど、「締切りがあれば歌はできます。まずは十首作ってみてください」って書いてあったんです。かわいい大松さんの顔のイラストが描いてあって（笑）。それでそのまま入りました。

小島　大松さん、ナイスです！

水上　入ってすぐの全国大会のときに、あいうえお順の席でお隣りに宮英子さんがいらして、声をかけてくださって。ほかの皆さんも温かく迎えてくださって。ただ若い人はあまりいないなぁっていう印象でしたけど。

高野　僕らの頃は、僕と同じ教育大の学生で柿崎村彦とか、慶応にいた坂野信彦とかね、学生でコスモスに入っている人がだいぶいましたけど。いまは学生で結社に入る人は少なくなってるね。

水上　私は早稲田短歌会のＯＢの方が多くいるガルマン歌会にも参加していて、コスモスの歌とのギャップにびっくりした記憶がありますけど、どっちからも吸収できてよかったなと思います。

大松　僕は「短歌人若手の会」の歌会にも出ていましたね。辰巳泰子さんとか宇田川寛之さんがいて。小池光さんや穂村弘さんが来たこともあって。コスモスの人付き合いだけだったら歌の幅は狭かったかもしれない。同世代の繋がりや理解は、歌を続ける上で心強かったです。

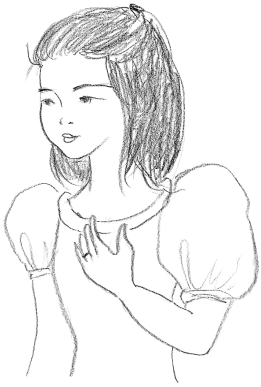
高野公彦氏

入会後のあれこれ

高野　コスモスには同世代が集まって、数人もしくは数十人の結社内同人誌がある。これが大きな特徴で、最初はＧケイオスという奥村さんがやっていたグループがありました。奥村さんは若さのあまりちょっと勝手なことをしたようで、宮先生に叱られてね、おとなしくなっていました（笑）。僕はコスモスに入ってまもなく奥村さんと会って、コスモスの秩序を乱さないようにしてＧケイオスを復活させましょうと相談して、「Ｇケイオス通信」というガリ版刷りの冊子を出したんです。僕はそこに「白秋の『雲母集』におけるシュールレアリスム的なもの」というような評論を書いたりしました。

そのＧケイオスが終わったあと、「群青」という同人誌を、武田弘之さんと杜沢光一郎さんと奥村さんと四人で始めたんですね。年に一回しか出さない雑誌を十年ぐらいやって、それから「桟橋」です。同人誌は年代の近い人が自由に活動できるし、十首以上の作品をまとめて作って選歌なしで発表できるのがいいですよね。いまも、「灯船」と「コクーン」などがあって、同人誌の活動が継続してるのが頼もしい。

小島　歴史がありますねー。皆さんそれぞれ歌歴を重ねて、結社に在籍するのも長くなってきたと思うんですけども、よかったことはもういろいろ出ましたけれど、例えば選を受けることの違和感とか、ほかにも息苦しいなっていう思いなどあったら、この際正直に白状して（笑）、今後を考えるのに



水上芙季氏

ぜひともご意見を。芙季さん、どうですか？

水上　まず大変なのは締切り（笑）。

小島　それはコスモスに関係ないですね！

水上　あんまり息苦しさは感じないですけど、歌集出したときの批評会が、結社の人と一緒の会しかないのが残念だなって思ったことはあります。

小島　そう、結社外の人の意見を聞く機会はないですね。

高野　ああ、僕も他結社の出版記念会に招待されてスピーチしたことありますけど、個人の出版記念会をするのは大変だと聞きました。費用は会費でまかないますが、もし足りない場合は著者本人が負担するそうで。

小島　そんなに華やかじゃない程度で、勉強会みたいな形であれば…。

大松　僕の第一歌集の批評会では、持ち出しはほぼなかったですねえ。会費制だったし、お祝いもいただいたし、それを会場費に当ててって感じだったんで。

小島　結社が主催している場合と、仲間にやってもらう場合とで、またちがってきますよね。

大松　お祝いメインの豪華な会は、減っているんじゃないですか。中身が大事だし、勉強熱心だし。

高野　なるほど、やり方によってずいぶん違うよね。コスモスは確かに、合同出版記念会をやるから、単独で出版記念会をするのは何となく遠慮する、という空気がありました。でも時代が変わりましたね。昔、歌集を出すのは主宰者の許可が必要でしたが、今は自由に出せます。

小島　大松さんは口語の作者ですけど、選を受けたときに違和感みたいなのはあったんですか？

大松　最初のうちは、わかってもらえなくて悔しい思いをしたこともありますね。いまの二十代の歌を見ると、俺、昔こういう方向の歌を作ってたのにって、思うことあります。コスモス以外ならもっと理解されてたかなぁって。選者と年齢が違い過ぎるデメリットは確かにあります。でも一方で、短歌としての核の部分に反応してもらえることもある。世代とは別に、骨太に作りなさいというメッセージを出すのは大切なことだと思いますね。

高野　僕らの頃の選者は、僕らの兄の世代、あるいは父の世代でしたけど、あなたがたの頃はもう祖父母の世代が多くなっていた（笑）。でも僕は選に対してなんの疑問も持たなかったですね。選から落ちた歌には何の未練も持たなかった。ずっとあとになって知ったんですが、落ちた歌をまた直して出すという人がいるのを聞いて驚きましたね。

大松　僕もそれはやったことないですけどね。

高野　落ちた歌を直してまた出すのは、その人の進歩のため

にはマイナスだと思います。きっぱり諦めて新たな歌を作るほうがいい。

大松　かつて違和感があったのは「コスモス短歌道場」という企画。「道場」って、師匠がいて下っ端がいるという前提の、上から目線。特別欄なのに選されて、七首中五首だったかな、載ったんです。変な感じしました。短歌の上ではみんな並列じゃないですか、現実的には選はあっても、みんな平等という気持ちでやってるのに、「道場」って。

高野　「道場」という名前は、違和感を覚えるよね。

小島　私は年代的に大松さんのような大きな違和感はなかったですけど、たまにかすかな違和感が…。歌を直してとってくださっていて、直されること自体はいいんですけど、その直しが、いかにも年配の男性の言い方になってしまっていて、その頃まだ若い女性だった私は、ええー、これはないなあってちょっと思いましたね。ただ、逆のこともあった。そのときはよくわかんなかったことが、例えば歌集を作るときになって見直してみて、はあーなるほどって。自分がちょっと成長したんだと思いますけど、後からわかって感謝したっていうこともたくさんありました。

大松達知氏

高野　僕も編集人になってから、選者の皆さんに「なるべく詠草を直さないでください、嫌がる人多いんで」と言っています。もし歌を直されてどうしても納得できない場合は、自分の歌集出すときに自分で直せばいいんです。

小島　そう、私も何首かこっそりもとに戻して歌集に入れたことがあります。ところが自分が選者になってみると、「ここを一言直せばすごく良い歌になるのに」っていうのもあって、自分も同じことをしてしまっているのかもしれないと、反省することがあります。

大松　選者になってから、けっこう直してるけど一回も文句言われたことはないので…。それは受け入れてくれているのか、我慢しているのか（笑）。

高野　ほんのちょっと直して、すごく良い歌にするのが最高の直し方なんでしょうね。

これからのコスモス、これからの結社

小島　そろそろ本日のテーマを意識していきたいと思うんですが、最近は新人賞の受賞者や応募してる方々をみても、結社に入っていない無所属の人が圧倒的に多くなっていて、そのことに対して、コスモスも含めた今後の短歌界全体を考えたときに、どんなふうに思われているのか、お聞かせ願えますか。大松さん、いかがですか。

大松　とにかくもう、時代の変化の大きさに驚きます。たとえばテレビ。視聴率が下がっていて、見ているのは高齢者だけなんて言われるほどです。YouTube などで好みの人の出る短い動画を見る傾向にありますよね。自分の好きなものを選び、そこから自分の世界を膨らませてゆく。そういう方向。とすると、いきなり結社に入るよりも、友だち同士のグループをまず作って、その中に歌柄や考えが合う人を誘ったり別のグループを作ったりする。そんな世の中の流れなんですかね。短歌結社はテレビみたいに、いろいろな番組を受け入れるおもしろさがあった。つまり、付き合いたい人や読みたい作品ばかりではないものと付き合うおもしろさ。それが一周して良い歌につながってゆく可能性がある。でもそれを受け入れるほど寛容な世の中じゃないのかなあ。

　経済観念も、世代の差がとても大きいようですよね。だから、一か月に二千円分の雑誌を買うとか、まして歌集を出すとか、かなりの贅沢。つねに費用対効果、つまりコスパが意識される。ゆっくりと話ができるわけじゃないし、好きな物も食べられないパーティーに何千円も払うのは耐えられない。もちろん、オタク的にここぞと思うところにはお金をかけるようです。ですから、短歌結社が、その「ここぞ」になれるかどうかが問われるわけです。厳しいですけれど。

　ただ、結社という存在は、選んで入るというより、なんか運命的な感じで入るのかもしれません。この四人もそうですね。自分で選んだものは自分の責任でやめられるけど、運命的に入ったグループはやめる理由がない。運命だから。この国、この時代に生まれましたって決められたらそこで生きるしかないというのに近い。短歌グループには、運とか縁とかが大切かもしれません。それをいまの二十代三十代の人が受け入れるかどうか。受け入れたら強いと思うのは、自分がもう上の世代になってしまったからですかねえ。

小島　芙季さんはどうですか？

水上　私も大松さんがおっしゃっていたことと似ているんですけど、作品を発表する場があったり、歌会があったりっていう結社の良さがあったけど、なくてももうツイッターとかインスタとかネット上でタダで自分の作品を読んでもらえる場ができてしまっているので、そちらの方に流れてしまう人たちが多いのかなと思います。自分と合う人たちだけでやったり…。違うところは、自分が選んで会う人ではない人と出会えるっていうのが結社の良いところなんですけど、そこを良いと思うかどうかはまた別なんで。結社は会社組織みたいなものなので、維持していくのが大変。熱意だけではなく、運営していくってことを考えていかなきゃいけないから…。ただ結社に入らないと、歴史を繋いでいくことがないので、大きな歴史から見ると何も無しになっちゃう、バラバラになっちゃうっていう気もします。

小島　なるほど。ネット系、詳しくはないですが、それでも想像以上に場が開かれて、多くの作者が熱心に学んでいることがさいきんわかってきました。高野さんどうでしょう、若いお二人の意見を聞いて。

高野　結社に入らないで短歌を作っている人は、ずっと五年

も十年も続くのか、それとも途中でやめてしまうか、どうなんでしょう？　結社の中にいると、友達がいたり締切りがあったりするからズルズルとでも続きますね。無所属だと持続しにくいんじゃないかなあ。結社に入っていると、やめるのも面倒だから続ける（笑）。

大松　インターネットのおかげで、三十年前ぐらいより若手歌人たちの繋がりが密になっているようです。昔は結社に入らないと歌人の友達が少なかったかもしれない。でも今はツイッターやインスタグラムなどで繋がれる。メディアのあり方が変わってしまったんです。だから、無所属でも孤立している印象はない。コスモスに歌を出しても誰も何も言ってくれないけれど、ツイッターに戯れ歌を載せると誰かがイイネ！ってボタンを押してくれるんですよ。それはやっぱり嬉しいことです。それよりも、本も雑誌も売れなくなってきた時代の中で、会員の機関誌ですけれど、コスモスとしてどういう魅力を打ち出すかっていうのが、問われているんだと思います。良い答えはないんですけど。

高野　イイネというのは、本当にその歌を正しく解釈して、ちゃんとした鑑識力があってイイネと言ってるの？

大松　イイネ！っていうのは良いって意味じゃなくて、「読んだ」っていう記号ですね。それはそれで嬉しいものですよ。

高野　結社にいると、選を受けたり、歌会で人の批評を聞いたりすることで、歌の良し悪しを判断する訓練をしているんですね。でも、自由にやっている人たちは、厳しくまじめにお互いの歌を批評しているんでしょうか？　歌はたくさん作り出されるけど、お互いイイネと言っているだけ、という恐れがある。インターネットが広がった時代が短歌史において暗黒の時代になっているかもしれない。長い目で見れば、結社に入っている吉川宏志さんの歌集や大松君の歌集が残ってゆくんじゃないですか。

大松　それはインターネットの問題じゃなくて、歌集を出すかどうかの問題ですよね。

高野　インターネットの人で、歌集を出さない人は残らないでしょ。

大松　レコードの普及初期には、レコードで聴くのは音楽じゃないと言われたそうです。メディア関係は大丈夫ですよ。コスモスでも諸事情で歌集のない人はいますし。残る残らないの価値観も変わっているのかもしれません。例えばインスタグラムでは投稿が翌日には残らない形式を選ぶ人も多いし。良し悪しは別にして、というか良し悪しは今のわれわれの観点ですし。いまの若手はお金ないと言いつつも歌集を買って、Zoomで読書会をしたりしてる。コスモスの会員で毎月一冊歌集読んでる人は少ないと思う。

小島　私たちはコスモスが好きで、コスモスの活動を大事にやっていきたいという気持ちは強いと思うんですけど、そしたら今のようないろいろな問題点、時代との齟齬とかを考えながら、じゃあどうしたらよいか。変化した方がいいところと、変化しない方がいいところっていうのを考えて終わりにしたいと思います。

高野　名案はないなあ。

大松　結社の役割の一つは、先輩歌人の歌を残すってことですよね。それは継続的にやっていくべきじゃないか。

小島　先ほど高野さんがおっしゃったことにも繋がるんですけど、同人誌みたいな結社内のグループにはまだ方向性があると思います。私は「コクーン」に…、本当は若い人の会だから私は入れないんですけど、長老会員ということで（笑）。老年の私が彼らの歌を批評するにはすごく注意深く読まないといけない。読んで若い人の意見を聞くことによって自分の古びた感受性が刺激される。でも、若いってことはまだ不安定なんですよね、表現もなにも。新しい時代の新しい表現を開拓していくのは素晴らしいことだけど、ともすれば自分勝手にやりすぎてしまって表現の基本的なところが疎かになる。古いって言われても、私はやっぱり宮先生から高野さんへ受け継がれて、高野さんが「桟橋」で私たちに教えてくれたものをきちっと後輩に伝えたい。小島があんなこと言ってたなって取捨選択はもちろん自由だけど、それでもリレーしていくってことが大事だと思っています。年齢に拘わらず同じ世代だけが集まると見えなくなるものがありますよね。

大松　会えない時期があっても、前からの知り合いの作品は、言葉だけではなく人生を読むおもしろさもありますね。それが何かのグループに継続して入ってないと切れやすくなることはあるでしょう。そこは結社の強みなのかなっていうふうには思います。

小島　コスモスがなければ、高野さんと水上芙季ちゃんが仲良くなるなんてことはあり得ないですからね（笑）。

高野　普通なら絶対繋がりがないような人と、東京歌会なんかで会って言葉を交わすのは本当に楽しいことです。この三年ばかり、ほとんどコスモスの人と会えないから寂しいですね。やっぱり人間的な繋がりが保てるっていうのがすごく良い面で、若い人たちにとっても魅力のあるところじゃないですか。だから逆にいうと、対面で人と接触することがないようなリモートの歌会は魅力が乏しい。生身の人間に会うことが楽しいんだから。

小島　そのお気持ちはよくわかりますし、私もリモートは苦手ですけど、でも、たとえば私が子育て中だった三十年前は、歌会へ行くなんてはじめからあきらめてました。今は子連れでも参加できる雰囲気にはなりましたが、それでもママたちは本当に気をつかって落ち着けない。リモートなら自宅で参加でき、自由に退出もできますので、そういう点では貴重な進化です。さらに進化すれば、どこの地域からでもリモートで東京歌会に参加できたり、逆に以前の出前講師のように選者がリモートで地方の歌会に参加したり、そんなことも実現するかもしれないと思うと、やはり期待はあります。

　さて、ゴールが近づいてきましたけど、何か付け加えたいことはありますか？

大松　核家族化して長いですよね。おじいちゃんおばあちゃんと会わない人も、結社に入ると、疑似おじいちゃんおばあちゃんに会える、逆に疑似孫にも会える（笑）。

高野　年が離れていて、自分の歌が理解してもらえないとか、見当はずれな批評をされるとか、嫌な気持ちになることって

あるじゃない。でも世の中はそういうもので、自分を理解してくれない人が一杯いる。その人たちと接触することで、人間的に鍛えられるわけですよ。理解してくれる人ばかりの中で歌を作っていると〈ひ弱な歌〉になると思う。

大松　コスモス創刊以来の七十年は、日本史上の最も豊かで安定した七十年とも言えます。これから人口が減るし、日本はある意味で下り坂なわけです。だからこそ下の世代の気持ちをわかってあげたいですよね。選者としてはもっと深く、寄り添って歌を読みたいのですけれども、なかなか。

高野　それは選者によっても違うからね。

小島　選者かどうかに関わらず、自分と感性が合う人と出会うと、とても深く理解してもらえますよね。

水上　結社は厳しいっていうイメージかもしれませんね。

大松　そもそも結社という呼び名が怖い。

小島　アヤシイ秘密結社みたいな（笑）。

高野　「短歌雑誌」とかにすれば。

小島　それぞれ、言い方をちょっと変えればいい。

高野　ふところに刃物を隠し持ってて、何かあったら刃物を取り出す、というようなイメージがあって、結社は怖いのかな（笑）。

小島　そこまで怖くは…。でも「短歌雑誌」とみんなで言うようにしましょう。

高野　若い人たちは、コスモスだけじゃなくて結社に対する抵抗感があるのかねえ？　君たちがそれを解きほぐして、結社の良さに気づいてもらって、結社人口を増やしながら短歌を持続していってほしいな、と願っています。何事も持続ってことが大切だから。「コクーン」で何とかがんばって。

小島　「コクーン」は、大松さんのリーダーシップがすばらしいから、活発に活動してますよ。

大松　いやあ、「コクーン」は閉鎖空間ですよね。

高野　「コクーン」に無所属の人もいれちゃうとか。

小島　それはダメって最初から言われましたもん。

高野　だから改革するわけ。初め無所属で「コクーン」に入って、二年ぐらい経ったらコスモスに入ってもらうとか（笑）。

小島　最後に高野長老からすばらしいメッセージがありましたので、ここで終わりたいと思います。皆さん、ありがとうございました。